

目次

はじめに i

第1部

「子どもの日本語教育」の実態

第1章

公立小学校での

「子どもの日本語教育」を知る（窪津宏美）…………… 3

第2章

日本社会の中の

「子どもの日本語教育」を知る（西川朋美）…………… 17

Column 01 就学前の子どもたちに必要な支援（松本一子） 37

第2部

「子どもの日本語教育」の実践

第3章

子どもの日本語力を評価する（櫻井千穂）…………… 43

第4章

子どものための日本語教材を使う・作る（池上摩希子）…… 61

第5章

教科学習と日本語学習をつなぐ（齋藤ひろみ）…………… 81

Column 02 中学生に必要なつながりを生む支援（樋口万喜子） 100

Column 03	高校卒業後も日本社会で 生きていくための支援（坂本昌代）	103
-----------	---------------------------------	-----

第3部

「子どもの日本語教育」で育てる言語の力

第6章

教科学習に必要な言語力について

考える（バトラー後藤裕子）	109
---------------	-----

第7章

子どもの第二言語習得について知る（西川朋美）	127
------------------------	-----

第8章

日本語という言語を外から見る（中石ゆうこ）	147
-----------------------	-----

Column 04	散在地域での「子どもの日本語教育」（青木由香）	167
-----------	-------------------------	-----

第9章

母語・継承語も育てる（高橋朋子）	171
------------------	-----

Column 05	外国人児童生徒だった経験から学んだこと （PINILLOS MATSUDA, Derek Kenji）	190
-----------	--	-----

おわりに	193
------	-----

索引	196
----	-----

執筆者紹介	198
-------	-----

第1章

公立小学校での 「子どもの日本語教育」を知る

窪津宏美

Q

日本の学校に外国人の子どもや日本語指導が必要な子どもが増えてきているという話をよく聞くのですが、具体的にイメージできません。指導や支援が必要なのは、どのような子どもたちでしょうか。学校でのサポートは大変ですか。特に言語に関する問題に関連して教えてください。

A

日本語指導が必要な子どもは、外国から来日する子どもに加え、日本で生まれたり育ったりした子どももいます。学校教育の中で行う日本語教育には難しさもありますが、同時にやりがいも感じています。この章では、これまで私が勤務した公立小学校での指導や支援の様子を紹介します。すべての学校が同じ体制を持っているわけではありませんが、地域のボランティアと連携をしたことでうまく進められた事例などを紹介していきます。

第2章

日本社会の中の 「子どもの日本語教育」を知る

西川朋美

Q

日本国内における「子どもの日本語教育」について、現状を教えてください。どこの国から来た子どもが多いのでしょうか、また、どのような経緯で日本にいらっしゃるのでしょうか。学校の教員に「子どもの日本語教育」の知識は必要ですか。

A

日本国内で「子どもの日本語教育」の対象となる子どもたちは、中国やブラジルの子どもが多いです。子どもたちの来日経緯はさまざまですが、それぞれに社会的背景や歴史的背景があります。現時点では、日本の学校に「日本語」という教員免許はありません。それは、教員であれば誰もが「子どもの日本語教育」を担当する可能性があるということになりますので、基本的なことは知っておくと良いと思います。

第3章

子どもの日本語力を評価する

櫻井千穂

Q

子どもがどのくらい日本語ができるのかを調べたいのですが、どのようなテストや評価法がありますか。話す力と書く力など、別々のテストがあるのでしょうか。それらのテストで何点以下だと「日本語指導が必要」だということになりますか。

A

本章で説明するように、子どもの日本語の力を把握するための評価法はさまざまで、話す力、書く力など別々に測る方法もあります。しかし、どの評価法を使う場合でも大事なのは、子どもが持っている「知識」を点数化・序列化するのではなく、日本語を使って何ができるかという子どもの実態を、多角的かつ包括的に捉えようとする視点を持つことです。さらに、日本語の力だけでなく、母語の力、思考力、態度・関心、生活の実態などを合わせて考えることが、指導・支援の方法を考えるうえで重要となります。

第4章

子どものための日本語教材を使う・作る

池上摩希子

Q

子どもに日本語を教えることになったのですが、どのような日本語教材がありますか。教科書として使うものを1冊選んだうえで、1学期間・1年間などの期間を決めて教科書の内容を順序通りに進めればよいのでしょうか。自分で教材を作る必要もありますか。

A

日本語教材には子どもを対象としたものもあるので、まずはいくつか手に取ってみることをおすすめします。そのなかには、教科書の他にも活動のアイデア集、教科学習の補助となるものも見られます。日本語教育が必要な子どもたちの多様性を考えると、1年や1学期という決まった期間で1冊の教科書を教えるという進め方を超える必要もあります。教材を自作したり身の回りの実物を使ったりすることも含めて、子どものための日本語教材を検討していきましょう。

第5章

教科学習と日本語学習をつなぐ

齋藤ひろみ

Q

日本語を学習中の子どもたちは、教科等の学習で困難に直面するケースが少なくありません。教科の知識・技能と見方・考え方を育み、日本語の力を高めるために、どのように学習の場をデザインし、実施することが期待されるのでしょうか。

A

内容（教科）と日本語の統合学習の考え方で授業を実施します。重要な点は、教師が説明して理解させるのではなく、知的な関心を掻き立て、観察、分析、創作等の各教科の探究活動を通して、気づき、理解できるようにデザインすることです。子どもの日本語の力に合わせて表現を選ぶことに加え、経験と培ってきた教科等の知識・技能、学習する力を活性化して学習に参加できるように活動を工夫します。活動で得た気づきを「ことば」に結びつけ、そのことばによる「相互作用」を通して「内容の理解」と「思考」を促すことが教師の役割です。

第6章

教科学習に必要な 言語力について考える

バトラー後藤裕子

Q

「子どもの日本語教育」において「学習言語」が重要だという話をよく聞きますが、「学習言語」とは一体どのようなものなのでしょうか。子どもを指導する際に、どのようなことに配慮すれば良いのか、具体的なイメージが持てるように教えてください。

A

学習言語とは、学校教育などの学習場面で、教科学習を促進するために必要な言語のことを指します。学習言語はすべての子どもたちにとって、身につけたい大切な言語のことです。以前は学習言語は日常言語とは切り離されたものだという考え方が中心でしたが、最近では家庭内や地域内で子どもたちが培ってきた（複数の言語使用を含む）言語資源や言語能力を生かしながら、教科学習を促進するための言語使用を手助けするという形のアプローチも実践され始めています。

第7章

子どもの第二言語習得について知る

西川朋美

Q

子どもは大人と比べて新しい言語を身につけるのがうまいという話をよく聞きます。確かに外国から来日して数年たった子どもは、きれいな発音で自然な日本語を話していますし、このままほうっておいても問題はないでしょうか。

A

子どもと大人の第二言語習得を比べた場合、長期的に見れば子どものほうが高い能力を身につけます。ただし、習得の速度は、大人のほうが速いこともあります。また、子どもであっても第二言語では簡単には習得できない部分もあり、二つ目の言語を効率的に習得できるようにするには支援の工夫が必要です。

第 8 章

日本語という言語を 外から見る

中石ゆうこ

Q

日本語を母語としない人にとって、日本語のどのようなところが難しいのでしょうか。英語や中国語と比べたときに、日本語にはどのような特徴がありますか。敬語や文字の違いくらいしか思いつかないのですが、ほかにもありますか。

A

日本語の難しさは学習者の母語や年齢によって異なりますが、音声では特殊音素（「ん」、「っ」、長音）の拍感覚をつかむのが難しい学習者が多くいます。語彙では日本語は文章を理解する際に必要になる語数が多いこと、文脈に合わせて和語、漢語、外来語を使い分けること、オノマトペ、助数詞などの区別を正しく理解することが難しいところです。日本語教育の文法は学習者が学びやすいように学校の国語科で学ぶ文法とは異なる体系で整理されています。

第9章

母語・継承語も育てる

高橋朋子

Q

日本に住み、日本の学校に通う子どもたちであれば、日本語ができれば十分ではないでしょうか。複数の言語を同時に身につけようとする、子どもが混乱するのではないのでしょうか。母語・継承語教育がなぜ大切なのか、また、どのような実践例があるのかを教えてください。

A

子どもは、家庭や学校という社会の中で心とことばを育みながら成長します。日本の学校生活や進路選択には日本語だけで十分かもしれません。しかし、家庭では親や兄弟、親戚とコミュニケーションを取るために母語・継承語が必要です。それ以外にも言語や文化の継承、学力の向上など、母語や継承語を学ぶ多くの意義が確認されています。混乱するのではなく、むしろ子どもたちが安心して生きていくための土台を作っているのです。日本の学校でも母語・継承語教育が実践されています。詳しい事例を見ていきましょう。